

Y7-01

医師業務負担軽減に対する当院の取り組み～外来常駐業務からの発信～

北見赤十字病院 医事課
加藤 優子、山田 剛、萩平 順一

【はじめに】医師の負担軽減につなげる検討をする場として、当院では副院長を筆頭に各部門の代表者からなる「医師及び医療関係職と事務職員等との役割分担の推進会議」が設置された。また、診療報酬の中で、総合入院体制加算・医師事務作業補助体制加算・急性期看護補助体制加算・ハイリスク分娩管理加算・呼吸ケアチーム加算・救命救急入院料・栄養サポートチーム加算小児入院医療管理加算2等が施設基準の要件として求められ、本推進会議の位置付けが重要性を増した。今回、当院が実践している外来常駐業務についてご紹介し、囑託職員の立場から提言する。

【実務】最大の目標は医師の業務負担軽減であることから、医師からの要望や、医師とのコミュニケーション、時間の有効活用等から外来常駐が理想と考え、診察室の一角に執務場所を整備。ストレスが掛かる文書作成を支援業務の軸に置き、診断書・証明書、診療情報提供書、退院サマリ、アンケート等の作成を行っている。

【教育・研修】実務を行う前に、教育・研修は必須である。電子カルテの概要・操作、文書作成支援システムの操作、疾患等の知識は最低最低限必要なことから、日本病院会の「医師事務作業補助者コース」を受講した。また、関係医学書を購入し文書作成の精度を上げる環境を整えた。

【結論】医師の業務負担軽減を軸に置き、外来常駐を行った。医師との距離が短ければ短い程、その効果は現れるものとする。支援する側として職員、囑託職員、非職員の立場の違いはあるが、医師の業務を理解し、コミュニケーションを保ち最大限の業務補助を行うことで、囑託職員の立場でも貢献することが可能である。

Y7-02

医療制度改革に堪えうる医事業務の進化～当院の取り組み～

北見赤十字病院 医事課
萩平 順一、山田 剛

【はじめに】平成16年度以降、DPC導入を切っ掛けに事務部門は大きな変革期を迎えた。かつて、質の高い医事課員とは、より精度の高いレセプト作成を目指し、解釈に沿った請求、病名付け等に没頭し、請求能力に長けた時代であった。しかし、DPC制度が医療界に浸透すると同時にその神話が陰を潜め、データ収集・加工・分析・統計・提言等といった能力が求められる時代に移った。更に、マネジメント能力も資質の一つとして、必要とされてきた。今回、医事業務が変革期を迎えた時代に対応した、当院の取り組みについて紹介する。

【業務改善】各病院の考えの違いにより業務内容は異なるが、医事業務は他事務部門とは違い多種多様な業務を行っている。業務の精度を上げるには、業務内容を明確化し具体化させることが重要である。医事業務の基本は、診療現場で施行した医療行為を漏れなく、迅速に、正確に請求することである。更に、入力したまたは収集した情報が、どのような価値を持ち、何に利用されているか等、二次利用を含めた理解も必要である。

例 診療報酬改定時の対応～改定解釈の理解と対応、
マスター管理、施設届出に伴う情報収集、
院内運用等

DPC請求 データ提出 二次利用

保険請求業務 チェック業務 データ送信

以上の例で上げた内容でも、到達目標に対し一つ一つを明確化し具体化させることで大きな進化が得られる。

【まとめ】事務部門の中で医事課は、診療データを多く扱う（扱える）特権部署である。豊富なデータを有効に扱うには、スキルは勿論、知識と実行が必要である。また、精度の高いデータを確保するには、日頃の積み重ねが重要である。結果、医療界の中で医事課の位置付けが益々重要となってくる。